

## 戒嚴令下台湾における日本人留学生にとつての台湾研究

久部良 和 子

一九八二年、琉球大学史学科二年次の時初めて訪れた外国が戒嚴令下の台湾だった。当時、台湾に関する情報は少なく、ただ政治的な問題は一切タブーと注意されながら、台北北部の陽明山にある中国文化大学日本語学科の学生たちと二泊三日の交流を行った。街中に反共のスローガンが掲げられ、憲兵や警察官が至る所で立哨しており、社会全体に緊張した雰囲気があった。それが戒嚴令下であることを後で知った。その時、交流した台湾の学生から日本に対して時代錯誤のような質問をされ少し違和感を覚えた。と同時に沖縄からもっとも近い隣国でありながら台湾の歴史について何も知らなかった自分が恥ずかしくなった。

その後、縁あって台湾に留学することになったが、当時は大学構内でも日本人に対して敵愾心を持った公安職員がおり、欧米帰りの教授が大半を占め、講義は中国本土の歴史や欧米の学術論文紹介が中心であった。台湾史に関する講義は全く行われず、学生同士の議論もなく監視された窮屈な環境であったため何度も挫折しかけた。その頃紹介されたのが中京大学社会科学研究所の台湾総督府文書調査会である。調査会に同行して台湾各地を見て回り、

現地の人々に接し、在野の郷土史研究家に接し、台湾の実態を垣間見ることができたのは、大学で受ける講義以上に得られることが大きかった。台湾の奥地に行けば、日本人というだけで歓迎され、沖縄出身というと家族のように接してくれる歓待を何度も経験した。このような出逢いのお陰で大学を辞めることなく何とか続けることができたのではないかと思う。

台湾では一般的に外省人、本省人、原住民（当時は、山地同胞とか山地人と呼ばれていた）という異なる言語や文化的背景から人々を区別するが、台湾の風俗習慣については、全く違和感なく理解することができた。それは、沖縄がかつて琉球王国であり中国大陸と朝貢関係を持ち、福建省からの移民が多い台湾と気候風土だけではなく、風俗習慣も似通っており、同じように中国大陸から互いに歴史的な影響を強く受けてきたということだけではない、何よりも大きな要因は、沖縄は明治政府によって「廢藩置県」や「琉球処分」により国際的に日本の領土となったこと。台湾は「琉球藩民遭難事件」によって日本政府による「台湾出兵」があり、沖縄と同じように日本の歴史に組み込まれてきた共通する歴史的な背景と共通する。

「廢藩置県」後も、「琉球人」と呼ばれた沖縄の人々が、植民地となった台湾に来て「日本人」としての意識が形成されていく過程は、「志那人」「熟蕃」「生蕃」「高砂族」等と呼ばれていた台湾に住む人々が人類学的に研究の対象として調査され、分類されて「日本人化」していく過程と類似している。明治政府が「琉球処分」に関する連の事務手続きを外務省から内務省に移行し、沖縄を「琉球藩」から「沖縄県」にしたように、台湾を日本の新しい領土に組み込んでいく。

その政策は「旧慣温存政策」や師範学校における教員養成など沖縄での経験が植民地台湾の経営に大いに参考に

なったのではないかと思われる。台湾総督府文書は、日本という国が「国家として、国の形を形成していく過程」や日本という領土に住む人々が「日本人」としての意識を形成していく過程と在り方、国の内外の政治的な思惑や意図を読み解くことができる行政文書でもある。

台湾総督府文書調査会を通して日本という国家の形や歴史の成り立ちを考えることができた。同時に、台湾をおして日本と沖繩の関係を比較する視点を持つことができるようになったと思う。

人類学修士論文の研究テーマを設定する際いろいろ悩んだ末、霧社事件の遺族が強制移住させられた地域である南投縣仁愛郷互助村清流集落（川中島）を選んだ。多くの研究者が注目している場所でもあるので出来ることなら避けて通りたいテーマであった。しかし、「霧社六社」のひとつであるホーゴ社頭目の息子で、花岡二郎の妻・花岡初子（高彩雲）さんの弟でもある高友正（アウイ・タダオ）氏との出会いがあった。高氏を初めて訪問した時に清流の人々は、日本人の私を歓迎してくださった。霧社事件から五〇年以上も経っており、強制移住させられた彼らの意識の変化を墳墓にみる「祖霊観」を通して、文化の変容を調べたいと思うようになった。調査期間は約一年間、一緒に畑仕事や集落の様々な行事に参加させてもらった。初期の頃、原住民の集落には入山許可証が必要で、何度か警察の派出所に申請したこともあったが、訪問を重ねると、顔見知りが増えて馴染みになるとそのまま通してもらえた。当時、集落には外部からの人はあまり見かけなかった。人口は約五〇〇人から六〇〇人。一九三一年に移住してきた時に水田耕作が非常に苦痛だったという高友正さんも農業に従事し、稲の品種について詳しく話して下さった。調査当時清流村は水田が青々とした美しい集落であった。事件当時七歳であったという高氏は、第二次世界大戦時の最後の高砂義勇隊として海軍に入隊したが出征するも高雄で終戦を迎える。一九九〇年になり、台

湾在住元日本兵の団体旅行で靖国神社参拝に参加する。高氏の長兄が日本名で祭られており、その「英霊」に参拝してきたと初めての日本旅行を楽しんでいた。また霧社事件抗日七〇周年記念式典の際、南投県郷公所から招待され清流村の人々は二台の観光バスに揺られ霧社に向かうバスの中で「レキシ、レキシ」と彼らの言葉（セーダツカ語）と日本語の「レキシ（歴史）」という言葉を用いて霧社事件を熱く語っていたのが印象にのこる。

一九八五年から続けて彼らの墳墓に対する変容を観察してきた。雑草がおい茂り荒廃していた墓地が行くたびごとに整備され、数多くあつた十字架が徐々に、漢民族風な墓を模した豪華な墳墓が目立つようになった。「清明節」には線香や紙銭を墓に供えるようになってきた。まだ日本名で刻銘された墓碑もいくつかみられるが、そのような墓碑銘は徐々に減少している。将来、清流村は、「霧社事件抗日英雄の遺族」が移住した村に変化していくだろう。清流村の「レキシ」が「歴史」に変わる日もそう遠くはないと思う。その時清流に住む人々が台湾総督府文書や日本人類学者の記録された資料を活用するときに変容の通過点として、高友正氏から聞いた思い出を記録として残したいと思う。日本統治時代から国民党時代、戒厳令下で名前と言葉を奪われた原住民族が自らの手で「レキシ（歴史）」を書き上げる日がくるときまで。